

思ひ、それを捨てようとするのである。右のやうな二面が式部にあつたことは注意されねばならない。

さきに述べた如く、式部は華やかな宮仕生活になじむことができず、内面的にはさびしい生活をなしてゐたのである。なぜなのであらうか。思ふに同僚達の中に於ける紫式部はいはば子供達の中の大人であつた。彼女はその高い見識と廣い知識との故に、どうしても他の女房達とはうちとけあふことができなかったであらう。それはまさに天才の孤獨といふべきである。

天才が狂氣となることはよくあることだ。紫式部は、しかし佛敎によつてそのやうになることから救はれたといつてよい。彼女は宮仕以前から佛道に入りたいと願つてゐた。そして彼女の日記の例の書簡文といはれてゐるところには、明かにその彼女の氣持がかなり具體的に進んでゐることが認められる。

人、といふともかくいふとも、ただ阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らむ、世のいとはしき事は、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに懈怠すべうも侍らず。とも彼女はいつてゐるのである。自體、式部のやうな人にあつては、佛道に入るより外に道はないのであるが、しかし彼女はしかもその道を著實に一步一步進んでゐたのであるといふことができる。

宗喀巴の中論釋について

京大助教 長尾雅人
文 博

中論乃至中觀學の研究は、わが國に於ても最近二三十年間に

長足の進歩を遂げたと思はれる。すなはち從來のように三論宗の敎學を通じて中論の所説を窺ふのみではなく、直接原典の研究が行はれ、その成果が上りつつあるからである。中論の註釋としては、漢譯の青目釋などの外に、印度から西藏への傳承に於いて、龍樹の自釋と稱せらるる無畏註をはじめ、佛、護、月稱、清辨その他の八本の註釋が作られたといふ。その中、梵本の現存するのは月稱(Candrakīrti)の淨明句論(Prasannapada)のみであつて、中論研究には常に之が中心となるであらう。然しここに擧げる宗喀巴のものは、いはば第九番目の註釋として亦異つた價値を荷ふものである。

宗喀巴(Tson ka pa, A. D. 1357-1419)は西藏の宗教改革者であり、黃敎の開祖であるが、彼は學者としても高く評價せらるべき人である。彼の大體の學問的立場は、中觀派、特に月稱の系統に屬する。その數多くの著作の一として、中論釋(北京版にて約二五〇枚)が見出されるが、之は本偈に對する忠實な註釋であり、その解説の仕方や思想的立場は、月稱を終始學ぶものの如くである。然しながら理長爲宗の態度を以て清辨その他を廣く引用し、そこに宗喀巴自身の立場——中觀學の發展した段階——を認め得るであらう。一讀して氣付く特色は、全體に對する詳細な科文が與へられてゐることであつて、義解の態度が進歩した段階にあることを示してゐる。その他、特に歸敬偈を重んずること、中論を學ぶ上の適切な次第順序が説かれてゐること、所謂二種の否定(Grāheda 遮遣)の論理が大きくとり上げられてゐることなどが我々の注意をひく。

科文については、宗喀巴には印度的な學風が残つてゐて、科文の上でも三論宗風の解釋とは異つてゐる様である。吉藏の疏にも屢々科文は行はれてゐるが、それは宗喀巴の如く全論を有機的統一的に展望する如き立場とはなつてゐない。宗喀巴は、中論が緣起が即ち自性空なりと説くものなることを明白に述べ此の緣起即空性を以て全體を統一せんとしてゐる。そして特に最後の二品なる第二十六、二十七品は、緣起即空性に對する實踐的道 (practice) を説くものとなし、吉藏が此の兩品を小乗の邪見を破すと科文づける如きと、甚だ異なるものがある。此等の科文に見られる點は月稱註の文章からもすべて汲みとられ得るものに外ならないが、それが宗喀巴によつてより自覺的となつてゐるといへよう。中論研究の順序を説く個所では、第十八觀我法品を最初におき、第二品、第八—十二品(以下人無我)、次いで第一品(以下法無我)といふ如き次第順序を指示してゐる。また二種の否定とは、pariyadāna と prasajya と稱せられる二種の遮遣で、中論の本旨がその後者にあるとなすことは清辯とともに相等しい。それは否定の反面に何らか他のものを肯定することを拒否する否定、一度きりの全體的の否定を意味する。その他龍樹の著作を六如理聚論として傳へること、引用書が多方面にわたつてゐることなどが注意せらるる。

この宗喀巴釋は月稱研究、特に西藏譯の月稱註を讀む上に大きな便宜と示唆とを與へるであらう。尙、宗喀巴には他に「了義不了義」、「菩提道次第」等の著述があるが、彼の中觀的立場は此の中論釋よりはむしろこれら二書の方によくあらはれてゐる様に思はれる。

彙報

眞宗學會

一、例會

十一月七日午後三時、於第七教室

「源信教學に於ける觀念と稱名」 立花徳眼

出席者 名畑、稻葉教授、上杉、西道副手、研究科 永田・

藤原 外學生十三名

一、宗祖聖人吉水御入室七百五十年記念展觀、並講演會

十一月十八日午後一時—五時 於圖書館並講堂

イ、式典 勤行、御本書後序拜讀

ロ、講演

略文類に就いて。 正親 含英氏

眞宗教義の兩面 大江 淳誠氏

ハ、展觀 教行信證諸本展觀

特別出陳 坂東御眞蹟本教行信證その他圖書館、宗

學院、日下、名畑、日野教授、西村萬一氏等より出

陳を受く。

佛教學會

一、例會

◇十月二十一日午後二時 於本學會議室

「多寶塔思想と摩訶迦葉に就て」 横超慧日教授

出席者 佐々木(教)、安井各講師、雲井助手、長谷岡副手、